
魔術に導かれし者

自由の翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術に導かれし者

【Nコード】

N6947F

【作者名】

自由の翼

【あらすじ】

ある日突然自分の世界が変わってしまった。知らない土地、人、常識では考えられないことが起こる世界で功龍は何を見るのか。

プロローグ（前書き）

今回はファンタジー的なものです
見ていってください

ブローグ

…どこだここは？

気づくとそこは自分の知らない場所。

気づくとそこはまったく見たことのない場所。

辺りには変な服を着ている人たちがいる。

そしてその人たちが自分に注目している。

そして目の前には…

「あんた…だれなの？」

一体ここはどこなんだ！！

わからない…

しかし一つだけ言えることがある。

それはさっきまでいた所とは全く別の場所だということ。

教えてくれ！！

俺は一体どこに来たんだ！

一体…どこ…に

……ドンッ！！

頭に衝撃を受けた。

痛みはそんなにはなかった

辺りを見渡す。

そこにはいつもと変わらない自分の部屋だった。

「なんだ…夢かよ。」

夢かと思つて一安心した。

日の光が眩しい。

そばにある時計を見ると針がちょうど真上を向いていた。

「やっべー！！もうこんな時間じゃねえか！」

寝過ぎた！！

完全に遅刻だ。

そう思つて学園に行く支度をしているとカレンダーが目に入った。

「…そうか今日学校開校記念日で休みなんだ」

急いで損をした。

そんな事を思いつつ着替えるために出した制服を戻して私服を取り出した。

いつもと変わらない日常。

いつもと変わらない世界。

しかしそれが180度変わってしまうことに俺は気づいていなかった。

エピソード1：異世界への扉

ある日の休日。

町中に出かけようとしていた。

はせくろくじゅうごう
支倉功龍

性別は男

成績等はいたって普通スポーツはできるほうで実家が剣道などをやっているから竹刀、刀などを使うことには慣れている。

今は実家とは離れた所に一人暮らしで住んでいる。

功龍の行っている高校は実家とは離れた所にある。

親父いわく

「漢たるもの一人暮らしでも生活できるようになれ。」

とのことでちょうど行きたかった高校も家から離れていたので一人暮らしをすることにした。

「しかし、一人暮らしを始めてからもう1年経つのか…」

時間の経過は早いもので1年があっという間に感じられた。

支度をすべて整えてからいつも通り出かけることにした。

しかし今日はいつもと違うことが起ころうとしていた…

功龍はそれにはまだ気づいていない。

「そっいえば新しく本屋ができたんだっけ？行ってみるか。」

家から歩いて2、30分ぐらいの所に新しい本屋ができていた。

功龍は基本家では読書などをしている。

適当に本をさがして立ち読みをしていると急に腹が減ってきた。

「…起きたのが12時だったからな。飯でも食いに行くか。」

そしてどこか適当なところで飯を食べてまた本屋で本を読むことにした。

…そろそろ帰るか。

時間は4時を回ったところ。

功龍は本屋をでて家に帰ることにした。

家の近くまで来たときに功龍は目の前にあるものに驚いた。

「なんだ？これ」

そこには穴らしきものが開いていた。

正確には空中に。

功龍はそれに気がついた。

しかし周りの人たちは気づいていない。

「なんで周りの人は見えていないんだ？」

そう思いながら功龍はその穴をずっと見ていた。

まるでこの中に入れと言っているみたいに功龍はその穴に近づいていった。

一歩、そしてまた一歩、穴に近づいていく

功龍は穴の目の前にきた。

(…なんか面白そうだな。)

功龍はその穴の中に入って行った。

穴に入った後は何が起こったか分からない。

急に視界が暗くなってさっきまでいた所とはちがう暗闇のなかに意識が飛んだ。

そして目を覚ますと…

功龍は空にいた。

「は???空?...冗談だろww」

そうあってほしかった。

しかし実際に空にいるのだ。

そしてその後起こることはただ一つ...

(落ちる!!!!!!)

そう思った直後に功龍は地面に向かって落ちて行った。

「うわあああああああああ!!」

これは夢じゃない!!現実だ!!

叫んでもどうにもならないがとにかく叫ぶしかなかった。

地面が近い!

(俺は死ぬのか?!?)

そうおもって目をつむった。

「もう駄目だ!絶対に死ぬ!!グッバイ俺!!」

そう思っただけで死んだ。

.....しかし功龍の意識はあった

もう地面に激突してもいいのに衝撃はなかった。

おそろおそろ目をあけるとそこには人がいた。

そして目の前には腕を組んで不思議な顔をしている女の子がいた。

「あんた...誰?」

そう聞いてきた女の子はとても可愛くてこんなにも可愛い子がいるのかと思えるほどだった。

しかしこの出来事が功龍の人生を変えてしまうことになる。

エピソード2：少女との出会い

突然周りの景色が変わったら人はどうなるだろうか？

ほとんどの人が戸惑うだろう。

周りにいる人たちが知らない人たちでその人たちが自分に注目していたらどうだろうか？

たぶん怖がってしまうだろう。

目の前に綺麗で可愛い女の子がいたらどうだろうか？

きっと緊張して喋れなくなるだろう。

今の俺はそんな状況にいる。

目の前にいる女の子は背が低めで中学2年生ぐらいだった。

髪の色はオレンジで腰ぐらいまでの長さがある。

普通の女の子だ。

しかし功龍はそう思わなかった。

（なんだ？普通の人とは、雰囲気が違う…）

とりあえずそんな感じがした。

剣道をやっていたからわかる。

人にはそれぞれなにかしらのオーラが出ているが目の前にいる女の子、いや、周りの奴ら全員のオーラが功龍にとって感じたことのないオーラだった。

「あんた名前は？」

女の子が聞いてきた。

可愛い声だった。

「…えっ？」

「だ・か・ら名前は？」

功龍はなぜこんな状況になっているのかまだわからないまま自分の名前を名乗った。

「支倉功龍…だ」

「ハセクラコウリュウ？変な名前ね。」

「コウと呼んでくれればいい。」

平静を保つので精一杯だった。

「じゃあコウ、あんたクラスは何？」

「…は？」

クラスって何だ？

そんな事を聞かれても困る。

クラスなんてものはないといったい何のことかわからない。

「クラスって何だ？」

「はあ？あんたクラス知らないの？」

「知らないも何も俺にそんなものはない。」

功龍はそうとしか答えられない。

クラスなんて存在しない。

そんな制度今の世界にはない。

「ないって…まさかあんたラ…」

女の子がそう言おうとしたときに一人の男が女の子よりもさきに口を開いた。

「セリア、お前よりによつてランダマーか？」

ランダマー？

なんなんだそれは？

そんな名前聞いたことがない。

男がそう言うのと周りの奴らも話はじめた。

「まさかセリアがランダマーになるなんてねえ…」

「でもそうなんじゃないセリア才能がないんだし。」

「確かにそれはあるかも…！」

なんだか周りが騒がしい。

みんなの話を聞いているとセリアという名前がよく出てきていたからここににいる女の子の名前がセリアということがわかった。

「あの…セリアさん？？ランダマーって…」

「うっさいわね！！あんたには関係ないでしょ…！」

えっ??何で俺怒られたの??
いきなり怒られた理由がわからない。

「みなさん静かにしなさい!!」

大きな声が響いた。

周りいたやつらは、話をやめ声のしたほうを向いた。

そこには大きな杖をもった老人がいた。

「まったく…それよりもセリア君こっちに来たまえ。おぬしもな。」

おぬしとはたぶん俺のことだろう。

そう思つて功龍もその人の所まで行つた。

「初めてだね。私の名前はカルト。カルト・フィ・サイフォス。」
は?

なにその名前??

聞いたことないし変な名前だ。

「それで、君の名前はなにかな?」

「あつ…支倉功龍です。」

「ハセクラコウリュウ…聞いたことのない名前だな。」

いや…そっちの名前のほうが聞いたことがないんだけど…

「呼びにくかったらコウでいいですよ。」

「わかつた。じゃあコウ君、きみはクラスを知らないと言つていたが本当なんだね?」

さっきの女の子…えーっと名前は確かセリアだったけど?

と同じ質問をしてきた。

「はい。そんなもの知りません。」

「そうか…ならやはりランダマーなのか。」

「あの…ひとつ聞いていいですか?」

功龍はこちらから質問をすることにした。

「なんだね?私にこたえられるなら何でもいいが。」

「じゃあ、クラスって何なんですか?そんなもの聞いたこともないし、多分俺が知っている言葉とはかけ離れていると思うんですよ。」

「…本当にクラスのことを知らないんだね。」

「はい。まったく言っていないほど知りません。」

「それじゃあ教えてあげよう。」

カルトと名乗った人は人通りクラスについて説明してくれた

「クラスとはそこにいる生徒が召喚の儀式を行った時に出てきた使い魔が人間だった場合のみに適応されることだな。クラスにはいろんな種類がある。白兵戦に特化しているパラディン、遠距離からの攻撃に特化しているアーチャー、罠などの支援攻撃の特化しているトラップラーなどじゃ。」

…ちよつとまで。

話の内容がいまいちつかめない。

クラスというものはそれぞれある部分が特化したいわゆる兵士みたいなものだということがわかった。

しかし儀式とは何だ??

召喚?

そんな魔法みたいなことができるわけないだろう。

そんな疑問を思っていたが話は進んでいく。

「そしてきみのクラスだが、どうやらランダマーに振り分けられたようだ。」

「そのランダマーって何ですか。」

「ランダマーとは、特化した能力がない代わりにあらゆるものから戦闘に関する知識を取り入れることができるクラスでな、自分の好きなように特技を変えることができるんじゃ。しかし知識を取り入れるといってもなかなかうまくいかないもので今までの召喚の儀式でもランダマーを召喚したものは2、3人ぐらいしかないのじゃ。まあ簡単にいえば一番弱いクラスということじゃ。」

ランダマーのことはわかった。

「その手の甲についている文字がその印じゃ。」

手の甲をみるといつの間にか文字が浮かび上がっていた。文字はなんて書いてあるのか分からなかった。

とりあえずクラスに関することがわかった。

しかし話を聞いていてもうひとつ疑問ができた。

「その…召喚の儀式ってなんですか？」

召喚の儀式なんて聞いてことがない。

本の中でしか出てきたことのない名前だ。

「なにつて…魔法のことじゃが？」

魔法？

なにを言っているんだこの人？

魔法なんて使えるわけがないだろう。

普通に考えればそう思うはずだ。

「魔法って…そんなのあるわけじゃないですか。」

「なんだね君は？魔法も知らないのか？しかたない…それじゃ見せてあげよう。」

そう言うとかルトは誰もいない方を向き杖を上にかざした。

そして振り下ろすと同時に叫んだ！！

「ファイヤーウォール！」

そう叫ぶと同時に地面から火の柱が出てきて空まで伸びていった。

…ありえない

自分の見ている光景がありえない状況だったから功龍は絶句した。

「今の魔法だよ。もう聞きたいことはないかね？」

「…はい、もうないです。」

それしか言えなかった。

カルトが戻ってくると周りにいた生徒たちが驚いたように話していた。

「いまのって上級魔法だったよな…」

「確かに、ファイヤーウォールは上級魔法だし…」

「詠唱なしで使えるなんてやっぱり先生はすごいな。」

そんな話を話していた。

どうやらカルトという人は先生らしい。

そしてカルト先生は生徒全員にむかつて話し始めた。

「これで全員の召喚の儀式は終わったからみんなはそれぞれ学院に戻るように。きょうの授業はこれで終わりじゃ。」

そういうとカルト先生はどこかへ消えて行った。

「じゃあ俺らも帰るか。」

「だな、今日は召喚した使い魔との交流からしなくちゃな。」

そう言つと全員が空に浮いた。

…これも魔法なのか。

そう思っていた功龍にセリアが

「あんた飛べないんでしょ？ だったら向こうに大きな建物があるからそこに行きなさい。私たち先についてるから。さっさときなさいよ。」

そついうと建物がある方向に飛んで行った。

辺りには召喚されたと思われる動物や龍などがいた。

中に人が数人いたがほとんどが動物ばかりだった。

「これからどうなるんだよ…俺。」

功龍はとんでもない所に来てしまったといまになって後悔した。

エピソード2：少女との出会い（後書き）

今回は初めてファンタジー系なものにチャレンジしましたがうまく書けたかどうかがよくわかりませんw
よかったら感想などを書いてください。

エピソード3：使い魔の役目

召喚の儀式がおこなわれてから功龍はセリアに言われたように大きな建物に向かっていた。

多少の距離はあったが1時間ぐらいで着いた。

そしてその建物に入ろうとしたときに建物の名前が書かれたプレートがあった。

ブレンステッド魔法学院

そこにはそう書いてあった。

魔法学院なんて普通はありえない。

しかし先ほどの魔法を見てしまったからには、この世に魔法があることを認めなくてはならない。

学院の中に入ると同じような格好をした人たちがたくさんいた。よくみると全員杖をもっている。

ということはここにいる奴らは全員魔法使いということになる。その中にセリアがいた。

セリアの近くまで行くといきなり怒られた。

「遅い！！いったいどれだけ時間がかかっていると思ってるのよ！」

そんな事を言われても普通に考えてあの距離は1時間はかかる。

「それでも結構速いと思うけど…」

「言い訳はいいの！まったく、他の人達の使い魔はもう殆ど来ているつてのに…」

確かに功龍よりも学院につくのが早い使い魔の方が多かった。

まあ人間の使い魔ではないのが殆どなので当たり前なのだが…

「それよりもあたしの名前、言っただけだったわね。」

セリアという名前しか聞いていなかったからすっかりとした名前は

聞いていない。

「あたしは、セリア・ル・ハレルン・マリアード。セリアと読んでくれてかまわないわ。」

…また変な名前だな。

そう思っていたが口には出さなかった。

功龍は多少のことではもう驚かなくなっていた。

「じゃあいくわよ。」

「行くつてどこに？」

突然そんな事を言われてもよくわからない。

「どこつて…私の部屋に決まってるじゃない。」

学院の横には寮らしき建物があった。

学院の生徒全員がここに住んでいるらしく、卒業するまではここに住むということになっている。

功龍はセリアの部屋に入った。

中はいたって普通の部屋で特に変わったものはなかった。

だが一つだけ違うところがあった。

（…電気がないな。）

部屋のどこを見ても電気を使うようなものがなかった。

あるのは火を使うものばかりで電気を使うものは何一つなかった。

「今日からここにあんたも住むんだからね。」

…え！？

そうなの？？

ここに住むつて女の子と二人で？？

「そ、それはいくらなんでも…」

「言つとくけど変なことしたらただじゃおかないんだからね!!」

功龍が言う前にそういった。

まあ変なことは考えそうだが変なことはしないだろう…

「それよりも、あんたクラスのことはわかったわよね。あと魔法の

ことも。」

「基本はな。」

「じゃあ、あんたの使い魔としての役割は知らないわよね。」
役割??

そんなのあるのか?

「クラスを知らなかったんだ。役割も知らないに決まっているだろ。つてか俺は『あんた』つて名前じゃないから。功龍つて名前があるから、さっきも言ったように。呼びにくかったらコウでもいいから。」

「あんたが使い魔としての役割をしつかりとできたらよんであげるわ。」

なんかうえから目線だな…

「使い魔っていうのは主人のために動くものなの。まあ簡単にいえば雑用係みたいなものよ。他にも主人の魔法の詠唱を相手に邪魔されないように防ぐつて役目もあるわね。」

「雑用ねえ…」

「なに?文句でもあんの?」

「いや、一応ここに住ましてもらったからそれくらいのことはいないと、つて思っただけ。」

「…いがいとしかつりしてるのね。」

まあ実家がそんな風だったからな…

「それよりもひとつ聞きたいことがあるんだが…」

「なに??言つてみなさいよ。」

ここに来た時に一番気になっていたこと…

「ここはどこだ??」

そう。

それが一番気になっていた。

日本ではないことは、確かだがここがどこかは知らない。もしかしたら別の国に飛ばされているかもしれない。

「どこつて…ここは、サルベリア王国だけど?」

サルベリア王国？

なんだその国は

そんな国は聞いたことがない。

地図にも載っていない国ということは確か。

「それじゃあ、何日だ？」

「いまは、クルの年、リヨウの月、ムの日、ツチの曜日よ。」

なんだそれ？

そんな数え方なんて存在しない。

そもそも年の言い方自体が違う。

クルの年とは何だ？

ここはいつたいどこなんだ…

ただ一つ言えること…

それはここが異世界だということ。

功龍がいた世界とは違う世界。

それだけがわかってる。

「それじゃあ早速部屋の掃除をしてもらおうかしら。それが終わったら洗濯もしてよね。」

早速仕事を与えられた。

部屋の掃除といっても部屋はそんなに広くはないし、洗濯物もそんなに量はなかった。

それに功龍は家事全般が得意な方なの50分ぐらいで終わらせた。

「掃除と洗濯終わったよ。」

そういうとセリアは驚いた声で

「もう終わったの！？いくらなんでも早すぎるわよ！」

そんなことをいつていたが周りを見渡してから功龍の方を向き

「…確かにとても綺麗になってるわね。洗濯もしっかりできているし。」

少し感心していたようだった。

「ご飯までまだ時間があるから、好きなことをしていいわよ。」
「わかった。」

こちらに来てからやっと自分の時間が作れた。
しかし時間が取れたからと言ってなにもすることがない。
読む本もないし竹刀などもない。

まったくいつてよいほどすることがなかった。

「セリア、竹刀とかってない??」

そう言うときセリアが不思議そうな顔をして

「竹刀ってなに?」

と聞いてきた。

…そうかこつちの世界は竹刀がないんだ。

「えっと簡単にいえば刀? 剣って言った方がいのかな? とりあえず
そんな感じのもの。」

「だったら学院の入り口にある武器屋にいきなさい。使い魔ならタ
ダでくれるから。」

功龍は学園の入り口に武器屋を見つけた。

ほかにも周りには防具や道具などを売っているところがあった。

武器屋に入るとそこには色んな剣があった。

「いらつしゃい。何か御用かな?」

奥にいる店員が話しかけてきた。

「ここで使い魔ならタダで買える剣があるって聞いたんですけど…」

「お前さん使い魔かい?? なら使い魔の証を見してくれ。」

証??

…ああ、あの手の甲に書いてある文字のことか。

功龍は店員に文字を見せると

「確かにおまえさんは使い魔だね。それじゃあどんな剣が欲しいん
だい??」

文字を確認すると、店員はたくさん剣を取り出した。

「えっと…長さが少し長くて片刃ならなんでも。」

「そうかい？じゃあこれなんかどうだい？？」

そう言って取り出した剣はちょうどいい長さで使いやすそうな剣だった。

「じゃあそれください。」

「まいど！使い魔さんだからお金はいいからな！」

本当にタダらしい…

「ありがとうございます。」

そうお礼をして店を出ようとしたら

「ちよつとまちな。」

功龍は呼び止められた。

「その剣がどこのだと聞かれたらブレンステッド魔法学院のフアリスタって店の剣だといっておくれよ。そうして有名になれば俺の店が王都に行けるかもしれないからな。」

「わかりました。そういつておきます。」

そういつて店を出た

あらためて見てみるが作りが良くてよくできている剣だった。結構いいものを買ったな。

そう思いながら功龍は広場らしきところで素振りを始めた。

今はこれしかやることがないから仕方ない。

功龍は素振りをしているときにふと思った。

「そついやぁ…元の世界に帰れるのか？俺？」

功龍は不安になった。

確かに帰れるかどうかは分からない。

もしかしたら一生帰れないかもしれない

「まあ時間はあるんだ。帰る方法はゆつくりと探していけばいいさ。」

「

功龍はそんな事を思いながら素振りを続けた。

エピソード3：使い魔の役目（後書き）

今回はうまく書けたでしょうか？

感想だけでもなくアドバイスなどしてくれたら嬉しいです。

エピソード4：セリアの魔術

ここはブレンステッド魔法学院の教室。

今日は授業がありセリアの教室の授業は魔術訓練だった。

魔法使いといってもそこまで魔法が使えない人がほとんどで入学してから強力な魔力を持っている人は数人しかない。

「今からは魔術訓練の授業をします。それぞれの得意な属性の魔術を私に見せて下さい。」

若い男性がそういった。

この人はこの教室を担当しているハールという先生だ。

通常授業に使い魔は参加しないという風になっているが人が使い魔の場合は許可されている。

なので功龍も一応授業にはでている。

他にも6、7人ぐらいの使い魔がいた。

それぞれがどのクラスに分けられているか分からなかったが功龍はあまり気にしなかった。

「それじゃあ、同じ属性の魔術が使える人達と組んで練習してください。」

ハール先生がそう言う生徒たちは、チームごとに分かれていった。セリアがいるグループは風を使った魔術だった。

大抵いまの生徒でも最低4種類の属性が使えるらしい。

しかし功龍がセリアにどの属性の魔術が使えるか聞いてみたら、

「そんなのあんたが知って何になるの？」

と言って教えてくれなかった。

とりあえず今は風の魔術を使っているから風は使えるのだとわかった。

魔術の属性は全部で20種類ぐらいある。

それに5個にまとまっていてそれぞれ、ファーストリング第一魔術、セカンドリング第二魔術、サードリング第三

魔術、^{フォースリング}第四魔術、に振り分けられている。
全種類使えるのは王族の人間でしかできなく、その中でいちばん上の人でしか使えないとほかの授業で言っていた。

他の所は氷、炎、土など色々な種類の魔術訓練をしていた。
どれもファースtringの魔術しか使っていない。
セカンド、サードリングも使えるらしいが、使える人が少ないからやらないらしい。

魔術の練習を開始してから10分ぐらいたってからハール先生がそれぞれのチームの魔術を見に回っていた。
そしてセリア達のところに来た。

「ここは風の魔術だったね。それじゃあどこまでの威力なのか見せて貰おうか。使う技は何でもいいよ。」

そう言うときハール先生は石を取り出した。

「この石は私の錬金で硬度をすこしあげたものですこれを破壊できるかどうかを見さしてもらいます。」

そういつてまず一人目の生徒が呪文を唱えた。

【風の刃よ、その力を持って切り刻め】

「ウインドカッター」

生徒が呪文を唱えると石のまわりに風があらわれ石を包んでいく。
しかし石は壊れずにそのままの状態が残っていた。

「威力はいいがまだまだ魔力が足りていない感じだな。」

ハール先生がそういった。

魔術ごとにも魔力の練り方で威力などが変わってくるらしい。

「次は誰だい？」

ハール先生がそう言うのと、

「私がやります。」

手を挙げたのはセリアだった。

「セリア君か。よし、やりたまえ。」

セリアは呪文を唱え始めた。

【蒼々たる風よ、我が身に集いて破滅させよ】

「ウインドクラッシュ」

……呪文を唱えても何も起こらない。

失敗か？

功龍がそう思った次の瞬間、石が砕け散った。

「ほう、風の中級魔術が使えるのか、それもここまでの威力で。」

ハール先生が関心したようにセリアにいった。

「ここまでなら他の種類の魔術も結構なところまでいけるのかね？」

ハール先生がそう言うのとセリアが戸惑ったように。

「え、えつと……その……」

「なんだね、なにか言って困ることもあるのかね??」

ハール先生がそう言うと同じチームにいた男子生徒が、

「先生！そいつは風以外の魔術が使えないんですよ!!」

……なんだって??

ということとはセリアが使える魔術は風だけということになる。

他の生徒は4種類は使えるというのになぜセリアだけが風しか使えないのか疑問に思った。

「うっさいわね!!別に風しか使えなくなっただけいいじゃない!!」

セリアが少し怒ったように、男子生徒にいった。

「でも風だけしか使えないとがありえない。もっとほかのも使えるようにしとけよ。」

そう言われるとセリアは何も言い返さなかった。

それから授業が終わってから功龍とセリアは寮に戻って行った。

「まあ気にすんな。練習すればいいことだろ。」

「なにがよ…」

「魔術のこと、風しか使えなくてもいいんじゃない?? あんなに威力強いんだし。」

功龍がそう言うときセリアは、

「たしかに威力は強いけど1つの魔術しか使えないのは嫌なのよ!」

と強く言われた。

さっきはあんなことを言っていたがやはりほかの魔術も使えるようになりたいらしい。

寮に入ろうとしたら後ろから声がした。

「ちよつと待てよ。」

功龍とセリアが振り返るとそこには男子生徒が一人いた。

「なにあんた? あたしに何か用?」

セリアがそう言うとき男子生徒が、

「お前さあ風の魔術しか使えないくせに、なに中級魔術なんて使ってんの?」

などと少し怒った様子で言った来た。

「1つの種類しかできないなら中級魔術なんて使ってんじゃないよ!」

「なんであんたにそんな事言われなさいけないの?」

「いくら魔術の威力が強いからといっても所詮ひとつだけだろ? 何種類も使えるやつより出しゃばってんじゃないよ。」

完全にヒガミとしてセリアに言っているだけだった。

「出しゃばってなんか…」

「じゃあ中級魔術なんてつかうな!! それが出しゃばってるって言うんだよ!」

ほとんど怒鳴り声と変わらないくらいの声でいつていた。

「…嫌よ、そんな事あんたに言われることじゃないし。」

「んだと??このっ…」

男子生徒が殴りかかろうとしたとき、

「ストップ。」

功龍が拳をとめた。

「いくらなんでもそこまで言う必要はないんじゃないかな?」

功龍がそう言うのと男子生徒が、

「お前誰だよ?邪魔すんじゃないよ。」

「人に名前を尋ねるときはまず、自分から名乗ったらどうだ??」

「あ??なんでお前なんぞに名前を名乗らないといけないんだ?お前が先に名乗れ。」

「ならおれの名前はないね。なぜならあなたが名乗らないなら俺も名乗らなくていいということだから。」

功龍は冷静にそういった。

「…お前貴族にそんな事言ってたで済むと思ってるのか?」

「貴族とか関係ないだろ。今のはお前の八つ当たり。それ以外の何でもない。」

「……てめえ、今何て言った??」

男子生徒の声がさっきよりも荒くなっていた。

「お前がセリアに八つ当たりしていると言った。」

そう言うといきなり功龍の胸ぐらをつかんで、

「てめえ貴族なめるのもいい加減にしろよ!!じゃないとお前殺すぞ!!」

…貴族のかけらもないな。

そんな事を思いつつ功龍は冷静に、

「殺せるんだったら殺してみれば??」

功龍がそう言うのと男子生徒が、

「…いいだろう、そこまで言うなら決闘だ。」

「決闘?」

「そうだ決闘だ！！てめえは絶対に殺す！！」

そういうと功龍の胸ぐらから手を外し、

「時間は2時間後、場所は広場でいいだろう。せいぜい今のうちにやり残したことをしておくんだな。」

そういつて去って行った。

「あんたばっかじゃないの！！貴族相手の決闘するなんて。」

セリアが功龍に向かってそういつた。

「なぜいけないんだ？大体あれは向こうから仕掛けてきたんだろ？」

「馬鹿！！そういうことじゃなくてあんた本当の殺されちゃうんだよ！！いい？貴族以外の決闘なら死人は出ない、でも貴族が決闘をするって言ったらどちらかが死ぬまで決闘をしないといけないのよ！！」

…なるほど。

つまり死ぬまで続けなくてはいけないということか。

「早く謝ってきなさい。今ならまだ間に合うかもしれないから！」

「…いやだね。」

「なんでよ！あんた死ぬんだよ？死ぬのが怖くないの??」

「死ぬのは怖いよ。でも俺が負けるはずがない。」

「うそ！絶対に負けて殺されるわ。」

「負けないよ。それに…」

「それにつて、なによ…」

「…それに女の顔を殴ろうとしたやつは許さない！！」

そう言う功龍は決闘の準備をしに行った。

エピソード5：決闘はばかる者（前書き）

更新遅れました（汗
年賀状とかで…

結構時間が、かかってしまいましたから…ははは…

今回は決闘に入りますよ。

…といってまだ決闘には入りませんがww
楽しんでいてください

エピソード5：決闘はばかる者

決闘が始まるまであと1時間ぐらいになった。

功龍は武器屋で買った長剣の手入れをしていた。

「ったく、なんであいつセリアのことをあんな風にいったんだろ…」
長剣の手入れをしているとセリアがきた。

「あんた…本当にあいつと決闘する気なの？」

「決まってるだろ」

功龍は決闘をやめる気はなかった。

一度決めたことは最後まであきらめないことが功龍のポリシーだった。

「そう…」

そう言うときセリアが杖を出して

「だったらあたしを倒してから行きなさい」

「…は？何言ってる…」

そう言うときセリアが魔術を放ってきた。

「ウインドスラッシュ」

その瞬間に杖の先からとてつもない勢いで風の刃が飛んできた。

「なっ…」

功龍は手に持っていた長剣で何とかそれをはじいた。

「へえ中々できるじゃないの」

「いきなり何すんだよ…！」

「あんたなんか戦いに行ってもどうせ負けるにきまつてるわ。だから決闘なんかに行けないようにすれば不戦勝となってあんたは死なずに済むんだから…！」

「何言ってるんだよ。あいつはお前のことを殴ろうとしたんだぞ！」

「だから何よ。別にそんなことどうだっていいわ」

セリアがそう言うのと同時にまた魔術が飛んできた。

「ウインドカッター」

今度は功龍の周りに風が現れる。

(くそっ、よけきれねえ…)

功龍は風の中から飛び出した。

しかし周り全体に風の刃があったため体のところどころを切った。

「いつてえ…」

「ほら見なさい。あたしなんか勝てない奴がほかの奴らに勝てるわけないじゃない。」

「…お前とは戦いたくない」

「手を抜いてるわけ?? 全力でこればあたしに勝てるってこと??」
セリアは容赦なく魔術を放ってくる。

「ウインドスラッシュ」

さっきと同じ魔術。

しかし速さが違う!

功龍はそれをはじくことができず長剣で受け止めた。

しかし威力が予想以上に強く受け止めきれずに吹き飛んだ。

「うわぁ!!」

「あんたは全然弱いんだからここでおとなしくしてなさい」

「うるさいな。ってかお前なんで詠唱なしでそんなに魔術が使えるだよ」

魔術訓練の授業のときは詠唱をしていた。

しかしセリアは今は詠唱をしていない。

「あたしが中級魔術を使えるのは知ってるわよね?? 中級魔術が使えるようになると下級魔術は詠唱なしでも使えるのよ。まあ威力は落ちるけどね。」

ということは詠唱をすれば今よりも強い魔術が使えるということになる。

「そう言うことかよ…」

功龍は何とか立ち上がった。

「だからさっさとおとなしく眠ってなさい!!」
そう言ってセリアが杖を振った。

「ウインドエッジ」

今度は風の衝撃波となつて襲い掛かってくる。

「ちい！やるしかないのか！！」

功龍も長剣を振り下ろした。

剣と衝撃波がぶつかり弾け飛ぶ。

「うわあああ！！」

「きゃああああ！！」

功龍とセリア両方が吹っ飛ばされた。

「何とかセリアを止める方法は……っ」

功龍が立ち上がるうとしたときに頭痛がした。

「なん……だ……これ」

頭痛がどんどん激しくなる。

「ああ……が」

耐えられないほどの痛みが功龍を襲う。

「がああああああああああ！！！！」

「……いったい何なの？」

セリアが不思議そうな顔で功龍を見ていた

「あたしの魔術は攻撃の魔術よ。こんなことになるはずがない。」

セリアはなぜこんなことが起きているのかが分からなかった。

「う……ああああ……なんなん……だよ、一体」

痛みはおさまらない。

「どうなつて……」

その時『何か』が見えた。

頭の中で。

「なん……なんだ、こ……れ」

その『何か』がはつきりとしてくる。

しかしその『何か』がわかる前に功龍の意識がなくなった。

「……だ。……次………みの………り込もう。」

「ここ………これた……成……はずだ。」
声が聞こえる。

何を言ってるかは聞きとれない。

「これが……すれば……らの………しかえ………」

「………するな。………きま……だろ。」

功龍は眼を開けた

自分の前には人影らしきものがある。

しかしその人影が本物なのか分からない。

はつきりとしたものが見えないくらい歪んでいる。

（ここは………どこだ）

「………どうだ？………じょうは………」

「………安定………この…………するで………」

唯一わかることはいま自分が閉じ込められている。

何かガラスのような物の中にいる。

その中に入れられて、液体の中にいる。

「…………領域…………します。」

「いい………この調…………か…………す………」

（俺はなにを）

なにをされているか分からないまま暗闇へと落ちて行った。

「………ここは」

気づくとそこはセリアの部屋だった。

しかし先程までと違うのがもう一人知らない人がいた。

「夢………か」

夢にしては現実味があつた。

確かに液体の中に入っている感触があつた。

（そう言えば傷………）

功龍がセリアに受けた傷を確認しようとしたが、痛みがなかった。

（治ってる？？なんで）

功龍が疑問に思っていると女の子が

「気づいたんですか??よかったあ。」

ほっ、としたのかその女の子は腰をおろした。

「もしかして君が…」

「そうですね!大した怪我ではなかったんですけど、治した方がいいと思って。」

「そうだったのか、ところで君は??」

「私ですか?私は隣の部屋に住んでいるレニーと言います。レニー・ルフラン・セント・ザ・シンファです。」

どうやらこの部屋での出来事に気づいたらしく、部屋の中をのぞいたら俺が倒れていて、セリアが困っていたから助けに入ったらしい。

「そう言えばセリアは??」

「さあ…どこかに行きましたけど。」

「そう……」

功龍はそう思っ立ち上がったとき

(……!!そう言えば決闘……)

「レニー今いつ??」

「え!?!い、今ですか!?!ええつと詳しい時間はわかりませんがたぶんコウさんが倒れてから45分ぐらいはたつてると思います……」

45分ってことは

「あと15分か!まだ間に合う。」

そう言っ功龍は広場に向かうために部屋を出ようとした。

「え、どこに…」

レニーがそう言おうとすると

「傷、治してくれてありがと。俺急いだから、それじゃ。」

そっいつて部屋を出て全速力で

広場に向かつて行った。

部屋を出る時にレニーが何か言っていたが、聞こえなかったのが気にしないことにした。

(そっいやあ…何で俺の名前知ってたんだろう…)

そんな事を思いながら功龍は広場に向かった。

エピソード5：決闘はばかる者（後書き）

決闘編??の始めです。

次回はちゃんとした決闘ですからね。

期待して待っていて下さい!!

エピソード6：決闘〜圧倒的な力〜

功龍が学園の広場に行くとそこにはもう沢山の見物人がいた。
そしてその見物人に囲まれている男子が一人。

（もう居んのかよ…）

功龍が遠くから様子を見ていると見物人の何人かがこちらに気づいた。

「おい！！来たぜ！！」

一人がそう言うとはかの奴らも功龍の方を向いた。

そしてこの決闘を申し込んできた本人が

「遅いじゃないか。貴族を待たせるとは…」

「何言つてんの？？時間には間に合っている。」

確かに決闘の時間までは5分ぐらいある。

「確かにまだ時間にはなっていない。しかし劣等種が貴族よりもあとにくるなんて聞いたことがなかったんでな。」

「劣等種？？なんだそりゃ？」

「貴族よりも位が下の者のことだ。」

「そんなのがあるのか。だが俺は劣等種とかどうとかいう前にセリアの使い魔だ。」

「ああ…そうだったね。君は劣等種ではなく使い魔だったね。」
と、笑いながらそいつは、言った。

「ところでお前、名前何なんだよ。まだ聞いてねえぞ。」

「それは失礼。僕の名はイーフォン。イーフォン・ル・ソレアーヂユ。」

「イーフォンね。俺は…」

「おっと。君が名乗る必要はないよ。」

「なぜだ？」

「だって、今から殺す奴の名前なんか聞いてもどうせ無駄だしね。」

「……」

こいつだけには負けたくねえ。
功龍はそう思った。

「決闘のルールは簡単だ。どちらかが死ぬまでやり続ける。それ以外にルールはない。」

決闘が始まろうとしていた。

決闘のルールはあいてを殺すこと。

しかし功龍はそんな事は出来なかった。

前の世界では剣道などでの勝負事では、ほとんど勝っていた。

しかしそれは相手がたいした怪我をしないとわかっていたからだ。

今回は違う。

相手を殺さなければならない。

そんなことはしたくない。

できれば降参してほしい。

しかしそんな事にはならないだろう。

功龍は悩んでいた。

「なにか、質問は？」

「別に……」

「じゃあ始めようか。」

互いに距離をとる。

そして間にいる人が合図を出す

「始め!!」

決闘が始まった。

合図と同時に功龍は、走り出した。

持っている長剣は刃ではなく、峰にしてある。

（峰打ちで気絶させるしかないか。）

功龍は相手を気絶させて勝負をつけるつもりだった。

だが、イーフォンは殺す気で功龍に向かっていった。

【砕け、そして塵となせ】

「ストーンブレイク」

地面から土の塊が飛んでくる。

功龍はそれを長剣で弾く。

「遅いよ。その攻撃。」

功龍はどんな距離を詰めていく。

「中々できるじゃないか。ならこれはどうだ。」

イーフォンが杖を振ると地面が盛り上がり、何かを作ろうとしている。

それを見た功龍は一旦後退した。

その塊は形を変えていき、鎧を着た人になった。

「これは、僕のゴーレムだよ。しかしゴーレムといっても女性。だから僕は、この子のことをラレスと呼んでいる。」

「へえ、名前をつけるなんてずいぶん立派なこった。」

そう言う功龍は長剣を刃に持ち替えた。

（人じゃないなら切っても大丈夫だな。）

功龍はゴーレムに向かって走って行った。

ゴーレムもこちらに向かって走ってくる。

そして功龍に向かって手に持っている槍を突き出してくる。

（…遅い！！）

それをかわして横から斬撃をはなった。

ギイン

切ったと思った。

しかし剣は相手のどこも切っていなかった。

（硬い…）

功龍は後ろに跳んだ。

しかし！

「僕のこと、忘れてないかい？？」

（しまった！！！！）

ゴーレムに気を取られて相手がもう一人いることを忘れていた。

「ストーンブレイク」

先ほどと同じ土の塊が飛んでくる。

しかし功龍は空中にいる。

よけられない。

功龍はもろに攻撃を食らった。

「がはっ」

地面に倒れる。

そこにゴーレムからの突きがくる。

それを何とか剣で受け止める。

しかし身動きが取れない。

それにイーフォンが魔術の詠唱を始めている。

【地の力、主の前に集いし、大いなる力となれ】

詠唱が長い。

（この状態で中級魔術なんて打たれたら…）

死ぬ。

よけないこの状態でまともに受ければ死ぬだろう。

しかし功龍は身動きが取れない。

（どうする！！なにか方法は…）

その時、功龍にまた頭痛がきた。

「ああああああああ！！！！ま、またかよ…」

しかしさつきと違うところがある。

……をつかえ！

声が聞こえる。

ちか…を使え！

「な…んだこれ？俺に呼びかけている??」

力を使え！

「力??力って何だよ!？」

力を使え！臆することはない。力を解き放て。」

「だからいったい何なんだよ力って…」

功龍が『何か』と話しているとイーフォンが

「これで終わりだ!！」

（しまった!まだ、こいつと…）

「グランドパニッシュ」

今度は土が先ほどより大きな塊となって降ってくる。

（だめだ…やられる!！）

そう思って目をつぶった。

早くしろ!！生き延びたかったら俺の力を使え!！

声がどんどん近づいてくる。

俺が変わりにあいつを殺ってやるよ!！

何かがそう言う、それが体の中に入ってきた。

「何をする気だ!！やめ…が、があああああああああああ」

ドゴオオオオオオオオオ

「……死んだな。」

やはり使い魔…いや、劣等種が貴族に勝てるはずがない。

そう思っでイーフォンは立ち去ろうとした。

「…どこに行くんだ？」

「なっ!！」

イーフォンは声のしたほうを振り向いた。

そこには先ほど確かに自分のグランドパニッシュを食らって死んだ
と思った『人物』が立っていた。

「お前…どうして生きている。」

あれを食らって生きているはずがない。

それに先ほどとは違うことが

「お前、その姿は……」

背中に羽が生えている。

「誰だ！さっきの奴じゃないな。決闘に乱入してくるとはどういうことだ。」

そしてその『人物』は、口を開いた。

「お前と闘っていたやつだよ。」

声は先ほど聞いていたのと同じだった。

しかし『何か』が違う。

「同じだと…ならば名乗れ!!」

「名前か??こいつ自体の名を名乗れば功龍となるな。」

「こいつ自体??何を言っている!!早く名乗れ!」

「はっ！俺に……」

その瞬間にとてつもない殺気が放たれた。

（なんだこの殺気は!!本当に先ほどの奴と同じなのか??それとも……）

イーフォンが考えるよりも早く『そいつ』は、こちらに向かって走ってきた。

「俺に、名なんかねえよ!!!!!!」

エピソード7：決闘〜解き放たれし力〜

『そいつ』が走ってくる。

(…早いっ！！)

先ほどとは、比べ物にならないぐらいのスピードでこちらに向かってくる。

「ラレスを…」

イーフォンは杖を振った。

先ほど出したゴーレムと同じものが3体、合計4体のゴーレムがあらわれた。

「行け！！あいつを止める！！」

そう言うところ、ゴーレムが『そいつ』に向かって突撃していく。

「まったく…何でこいつはあんなやつにやられそうになってんだか

…」

ゴーレムからの薙ぎ払いがくる。

それを剣で受け止めて、そのまま突きを繰り出す。

「無駄だよ。お前の剣じゃラレスは切れない！！」

イーフォンがそう言うところ、『そいつ』は、笑いながら

「あいつと俺を同じと考えない方がいいぞ。」

ゴーレムの腹を狙い剣を突き出す。

剣は目標に刺さりその部分から横薙ぎに剣を抜く。

体を切られたゴーレムはバランスを崩して地面に倒れる。

「なっ…なぜ切れる！！さっきは…」

「だから行つたろ。」

そう言った瞬間に『そいつ』の姿が消えた。

「…どこに。」

そして次の瞬間に、ゴーレム3体の首が吹き飛んだ。

「あいつと俺を同じと考えるな、って。」

『そいつ』がまた先ほどと同じところに姿を現した。

「くそっ!!」

イーフォンがまた杖を振る。

次は、ゴーレムが10体ほどあらわれた。

それぞれ槍、剣、斧など色々な武装をしている。

「数を多くすればいいってか？無駄なことだ。」

ゴーレムが一斉に襲い掛かる。

そしてイーフォンは魔術の詠唱に入る。

（中級じゃ駄目だ！複合魔術じゃないと）

しかし複合魔術に詠唱は普通の魔術よりも詠唱が長い。

（あんなやつ相手に使えるかどうかかわからんがそれしかない!!）

イーフォンは魔術の詠唱を始めた。

【焰の意志よ、われの前に集い、悪を滅ぼす力となせ

地の力、邪を滅ぼす槍となり、我の志のもとに牙を向け】

詠唱がまだ終わらない。

イーフォンがやろうとしているのは3重魔術。

詠唱をしている間にもゴーレムの数は少なくなり、残り3体。

（間に合うか！）

イーフォンは最後の詠唱を始める。

【冷気を纏いし神の力よ、我が前にその姿を現し、力を託さん】
魔術が完成する。

「くらえ!!ランサードインパクト」

そう言うイーフォンの前に槍が具現化して現れる。

それと同じものが3本あらわれてそれぞれ火、土、氷を纏っている。

「大した魔術だな。」

『そいつ』が最後のゴーレムにとどめをさしながらそう言った。

「怖気づいたか。だがこれだ最後だ。」

イーフォンが杖を振ると槍が『そいつ』にめがけて飛んでいく。

しかし『そいつ』は避けようとはせずに剣を構えている。

「はっ！！死ぬことがわかってやけになったか！！」

「どうだかな？」

そしてそいつは口を開く。

【闇の力、わが剣に纏いすべてを滅ぼせ】

『そいつ』がそう言うのと槍に向かって剣を振り下ろした。

「「魔人裂斬衝」」

その瞬間に槍がすべて闇に包まれる。

（いったい何が起きている…！！）

イーフォンが闇のあるところを見ていた。

3本の槍がどうなったかわからない。

そして除々に闇がなくなっていく。

そしてそこにあるのは…

『そいつ』が立っていた。

先ほどと変わらない様子で立っている。

「な…なぜだ！！なぜ死なない！！なぜあれほどの魔術を剣ひと振りで消滅させることができた！！」

「簡単なことだ！お前の放った魔術より俺の放った一撃の方が強かっただけだ。」

「そんなことはない！おまえは俺が魔術を放つ直前までラレスと闘っていたはずだ！！それなのになぜあの短時間で俺よりも強い攻撃が放てた！お前は魔術が使えないはずだ！！！！もし使えたとしても短時間であれほどまでの威力の魔術がある筈がない！」

イーフォンが声を荒げていった。

何が起こったのか分からない。

自分が今使える最大の魔術を放ったはずだった。

しかしそれがいとも容易く消されてしまったことに納得がいかなかった。

「世の中、知らないこともたくさんあるんだよ。」

『そいつ』がそう言うのが納得いかなかった。

「どのみちおまえはここで終わりだ。イーフォン。」

そう言う『そいつ』が何かを言い始める。

【光よ、我に力を与え、悪を滅さん】

聞いたことがない詠唱。

「魔術…いや、こんな詠唱聞いたことがないそれにあいつはランダムーだろ？魔術は使えないはずだ。…それに」

光の魔術は第四魔術だ。

「そんな魔術があんなやつに使えるわけがない。」

そしてその力が解き放たれる。

「シャイニングレイ」

『そいつ』がそう言うのと無数の光が飛んできた。

その光はイーフォンの両手、両足をつ貫く。

「ぎゃああああああああああ」

断末魔の叫びが広場に響く。

そしてイーフォンは気絶した。

「命まではとらん。あいつがそう言っているからな。」

『そいつ』は周りの奴らを見渡して。

「おい！！誰かこいつの治療をしてくれ！早くしないと死ぬぜ。」

しかし中々助けに来ない。

どうやら怖がっているらしい。

（まあ無理もないか…）

そして『そいつ』はその場を立ち去った。

「おい誰かイーフォン助けてやれよ。」

『そいつ』がいなくなってから数人の生徒がイーフォンの助けに入った。

別に命に問題はない。

ただ動けないだけ。

「おい…一体あいつ誰なんだよ？」

一人がそう言った。

「確か…セリアの使い魔だったけど…」

「セリアのって…あのランダマーか？」

「多分そうだと…」

周りの生徒も『そいつ』のことを話していた。

「でも、途中からいきなり人が変わったみたいだったよね…」

「うん…確かに動きがまるで別人みたいだったな。それに羽が生えたし。」

「それにイーフォンを倒すなんて…」

「確かイーフォンって学年で2番目に強かったんだよね？」

「うん…上級生でも勝てない人が多いほどの実力者だよ。」

「それを倒すなんて…一体？」

そんな事を生徒が話しているとセリアが走ってきた。

「はあはあ…け、決闘はどうなったの??」

「セリア!! あんたどこに行ってたの？」

話しかけてきたのは、クレア。センクル・オブ・ランカン・ジ・クレアという人物。

セリアとは仲の良い友達だ。

「ちよつと校長に呼ばれて。それよりも決闘は? コウはどうなったの?」

「それが…」

クレアは広場の方を向いた。
表情が陰しい。

(まさか…)

セリアがクレアの向いている方を見た。

そこには気絶しているイーフォンの姿があった。

「なんでイーフォンが倒れてるの？コウが勝ったの？」

「うん…でも一体どうなってるの、あんたの使い魔??」

「どうって…なにが？」

「最初はまったく歯が立たないほどやられたのに、途中から人が変わったみたいに強くなるし、わたしたちの知らない魔術をつかうし

…」

「魔術って、あいつ魔術使えるの？」

「え……うん。たぶんそうだと思う。」

「そんな…しかも知らない魔術？」

「セリア、もしかしてあんたも知らないの？」

セリアは首を縦に振った。

「コウあんた一体…」

突然現れて、突然決闘なんかして、それに勝つなんて。

「一体何者なのよ??」

セリアそう思った

エピソード7：決闘〜解き放たれし力〜（後書き）

決闘編ラストです。

短かったですがどうでしたか？

上手く書けたかどうか心配です…（汗

感想・アドバイスなど何でもいいのでお願いします

エピソード8：解き明かされる真実

…何があつた？

功龍は眼を覚ました。

今自分の目に映っているのは学園。

（…ってことは、学園の外か。）

なぜここにいいのか分からない。

功龍は学園に戻ろうとした。

しかし、足が動かない。

（あれ…なんで足が動かないんだ…）

どれだけ動かそうとしても足は動かない。

（いったい何があつた。それになぜ俺はここに…）

功龍は自分がどうやってここに来たのか分からない。

なぜこんなところに気のか、それすらもわからなかった。

（そう言えば決闘、どうなったんだ…）

途中で意識がなくなった。

そこまでしか覚えていない。

そしてあの『声』。

あれはなんだつたんだ？

功龍が考える前に

「やっとながついたか…」

誰かが話しかけている。

しかしその声は功龍のものだった。

（…どうしたことだ？）

「どうって…今話しかけてるのはお前だ。」

（…意味がわからん）

「いわゆる別人格といったところか。」

（なぜ俺に別人格がある？）

功龍は戸惑っていた。

自分に別人格があったことを

「お前…覚えてないのか？」

（何をだよ？）

「…ふう、どうやら記憶を消されてるな。」

（記憶を消されてるってどういうことだ。説明をしる。）

「わかった。っとその前にこの体お前に返すぞ。」

もう一人がそう言うと言功龍に一瞬頭痛が起きた。

しかし今回は前よりも強くなくすぐに収まった。

体を動かす。

思いど通りに体は、動いた。

（それじゃあ、話そうか。）

「その前に、お前の名前を聞かせろ。じゃないと呼びにくい。」

（うゝん…名前なんて俺にはないしな…）

「じゃありユウでいいだろ。俺は、コウって呼ばれるからな。」

（承知した。）

「それじゃあ、話してくれないかリユウ。」

（そうだな…ことの始まりは、4年前だ。）

景色が変わる。

そこにはよく見なれた光景が映っていた

場所は日本。

「ここは…」

（俺の力でお前の過去の映像を脳に直接見せている。）

「そう言うことね…」

功龍が見た光景は実家で休んでいる自分だった。

時期は、夏。

ちょうど夏休みのときだった。

「なんでこの映像とお前が関係あるんだ？」

（…お前特別人格施設つての知ってるか。）

「何それ？聞いたことがないな。」

（お前はそこに連れて行かれる。その少し前だ。）

…連れて行かれる？

そんな記憶はない。

そもそも特別人格施設なんてもの自体聞いたことがなかった。

「その特別人格施設つて？」

（平たくいえば戦闘用人格を作るための施設だ。）

「…それがお前か？」

（そう。お前に宿っている俺もだ。）

「なんでお前が俺なんかに…」

（見てればわかるさ。）

功龍はとりあえず今見ている映像に集中した。

「功龍、ちよつといいか？」

「なんだ、親父。」

功龍を読んだのは親父だった。

「お前に用事があつてな。」

「なに？また道場関係なの？」

「いや…今回は違う。」

親父の顔が神妙だった。

「一体どうしたんだ、親父。」

功龍がそう言う

「……すまん……」

小さくてよく聞き取れなかった。

「親父、なんて…」

なんて言ったのか聞こうとはできなかった。

なぜなら親父が手刀で功龍を気絶させたからだった。

「…これでいいのか？」

親父がそう言うのと扉から一人の人物が現れた。

「うん！でも、すごいな！！自分の息子なのに簡単にこんなことができるなんて！」

「これで家の家族は無事なんだろうな。」

「安心して下さいよ。あなたは約束を守った。それなら、あなたと交わした契約をこちら側も守らなければならない。」

「ならいいが…功龍は、無事に帰ってくるんだろうな？」

「それは、どうかな？失敗すれば死ぬかもね…」

「っ！！」

「では、私はこれで。…そうそう息子さん、返すのは早くて1年後です。」

そう言うといつは去って行った。

功龍が連れて行かれたのは、特別人格施設だった。

そのなかには何人も研究員がいた。

「さあみんな集まって。」

先ほどの男がそう言うと言った研究員達が集まってきた。

「この子が今回の人格の適合者だ。これを成功させるよ。」

「本当にこんな子が適合者なんですか、希利亞さん？」

そう言われた男…希利亞きりあと呼ばれた人物はこの施設の長だった。

「うん！適合者テストでも80%の適合率だからね。」

「ならいいですが…」

「じゃあ早速始めようか！！」

希利亞がそう言うと言った研究員たちがそれぞれの持ち場についた。

そして功龍はガラス管の中に入れて緑色の液体が入れられた。体には何本ものチューブがつけられる。

「慎重にね！失敗したらもう後がないんだから。」

希利亞がそう言うと、作業が始まった。

「まずは火の力から入れます。」

「個体値安定。火の力注入OKです。」

「注入開始。」

そう言うのと体につないであるチューブから何かがでてきて功龍の体に入ってきた。

「状態安定。身体、精神ともに異常なし。」

「火の力注入率50%、55、57、63、68、70、76、80%超えました。」

「うん！順調だね！それじゃあ水の力の注入も開始して。」

「了解。水の力、注入開始します。」

そしてまた功龍の体に何かが入ってきた。

「状態安定。各部以上なし。」

「火、水、両方の融合率90%」

「水の力注入率70%を超えました。」

「ここまでいいね！！次からだよ。ここまででは、他の実験体でもできたけど次からは出来なかったからね。気を抜かないように。」

「了解」

「なにをやっているんだ？」

（あれは、俺の人格を入れるための準備さ。）

「準備？リュウがそのまま入ってきたんじゃないのか？」

（俺と同じ体質にするためにやっていることだよ。）

「お前と同じ？リュウは作られた人格じゃないのか？」

（俺はもともと異常種として生まれたからな。もともと力があつたが、環境が悪くてすぐに死んでしまった。）

「そう…だったのか。」

（で、その人格を拾ったのが希利亞ってこと。死んだ俺から人格だけを抜いた。）

「だから名前がないってわけか。」

（そう言うことだ。さて、ここからは長くなるから飛ばすか。）

「その間、俺はどうなった？」

（力の注入は順調に進んで行ったよ。最後の3つまでな。）

「その最後の3つが異常だったのか。」

（まあ成功したにはしたんだけど…見ればわかるよ。）

「どれだけ飛ばすんだ？」

（半年ぐらいだな。）

「盾の力まで注入が完了しました。」

「よし！！じゃあ仕上げと行くよ。残りの光の力、闇の力を入れるよ。」

「最後の一つは…」

「人格と一緒に入れる。でないと暴走しちゃうからね！！」

「それでは光の力を注入します。」

「以上なし。いつでもOKです。」

「光の力注入開始。」

チューブから流れ込んでくる。

「安定領域到達まで残り60%です。」

「やっぱり今までよりも注入率が低いな…」

「注入率10%、12、13、15、19、20、26、30%超ええました。」

「それじゃあ闇の力を入れようか！」

「了解。闇の力注入開始。」

光の力と混ざるように闇の力が入ってくる。

「個体の状態低下、しかし安定領域は維持。」

「融合率80%。しっかりと融合する模様。」

「光の力注入率50%、闇の力注入率30%」
「うん！いいねえ！慎重にやっていつてよ！」

希利亞も作業に加わっている。

そこまですなければ成功しない代物だからだ。

「以前身体、精神ともに異常なし。」

「光の力安定領域の70%を超えました。」

「闇の力はどうなっている？」

「50%、56、59、63、66、69、70%超えました。」

「うん！注入は成功だね！！各部以上は？」

「問題ありません。」

「じゃあ最終段階に……」

「っ！ちよつと待って下さい！」

「なに？どうしたの？」

「脳波に異常が……」

「なに……」

希利亞の顔が曇った。

ここまで来て失敗は許されない。

「ただ…普通の異常とは少し違うんです。」

「違う？どういうことだ。」

「理論上ここまでの力を入れると本来の人格が消えて、今入れようとしている人格が変わってしまうんですよね？」

「そうだ、本来の人格が耐えきれなくなり人格が入れ替わるようになっっている。それがどうした？」

「その…本来の人格が消滅していませんけど……」

「なんだって！」

こんなことが起きるのは予想外だった。

しかしここまで来てあきらめるわけにはいかなかった。

「……残りの2つを入れれば大丈夫だろう。」

「わかりました。」

「それじゃあいくぞ」

「了解」

「神の力、注入開始します。」

最後に入れる力は神の力。

すべての力において最強の力。

しかし最強がゆえに適合者がいなかった。

だが今回は今まで以上に進んで行った。

（今回は成功するはずだ）

希利亚はそう思いながら作業に取り掛かった。

「神の力注入率2%」

「個体値安定、身体、精神、異常なし。」

「脳波には気をつけて作業に取り掛かれよ。」

「了解」

「注入率10%超えました。」

「20%になったら、人格を入れよう。人格さえ適合すればすぐに終わる。」

「注入率12、13、15、16、17、18、19……」

「よし！人格を入れる準備を……」

「注入率19%で停止！！」

「なに！」

「精神に異状！安定領域を出ます。」

「安定剤を入れる！！今すぐにだ！！」

「はい！！安定剤注入開始！」

まずい……

ここにきて異常が出ってしまった。

（失敗するのか？）

しかし安定剤を入れたことによってなんとか安定領域は保つことができた。

「安定剤の効果が切れる前に終わらせるよ！人格を入れて！」

「人格注入開始！」

実験は最終段階に入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6947f/>

魔術に導かれし者

2010年10月10日00時56分発行